

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、どの
ように保障しているか

① 分散会

I. はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、子どもの変容、教職員の変容、これからの展望について4本の報告を軸に話し合った。また、2日間を通して「子どもたちが安心して生活できる集団づくりをどう進めていくのか」、「反差別の活動をどう組織していくのか」、「自分にとっての自主活動は何か」というテーマで討議、交流を進めた。

II. 報告および質疑討論の概要

ー報告1ー④

Aとともに明らかにしてきたもの

(東京都同教)

1本目のレポートでは、他の生徒とは格段に違って人権・同和問題の学習に熱量を発揮したAとのかかわりの中で報告者自身が考えてきたことが報告された。過去の自分の在り方を振り返り、「どの子も」いる教室にこそ、みんなが育ちあう関係がうまれるということを実感できたということが語られた。

ー主な質疑と応答ー

熊本 子どもの表記について。子どもの名前は親の願いや思いがあってつけられたもの。A、B、Cではなく、仮名にしてほしい。(意見)

兵庫 実践を進めていく中でAはどんなふうに変わっていったのか。取組によって学校の体制は変わっていったのか。

報告者 Aは自分のことを障がい者だと言い、そのことを自身を強く見せたりするために利用していた。しかし、それは違うということをはっきり伝えてきたので、そのことを自分自身で考えていくようになったと思う。学校の体制は変わったとはい切れない。しかし、Aとのかかわりによって、一人ひとりの教員の在り方が問われたと感じている。

京都 個人で取り組んでいかないといけないものなのか。全校体制でしんどさを抱えさせられている子を見ていこうというシステムはないのか。

報告者 学校の支援体制は形としてはある。支援が必要な生徒の情報共有の会議などはある。しかし、その支援が一人の子どもに届いているかと言われると届いていない。ただ、全校で情報を共有し

ようとしたり、Aとのかかわりをみんなで考えたりする機会はできてきて、変わりつつあると感じる。

熊本 子どもたちを分ける教育についてどう考えているのか。

報告者 自分は分ける必要はないと思っている。以前は、「ここにいるべきではない」「ここにいるはずの子ではない」そんな風に考えて、親や子どもを説得し、教室から分けようとしていた。Bという生徒とのかかわりで、それはおかしいということに気づかされた。教育の在り方として「生徒たちは共に生きている。その中でなかまにもなりながら多くのことを学んでいる」そんな考えを失わずにクラスづくりをしていきたいと考えるようになった。

熊本 子どもたちの中にある差別の現実はどうなものがあったのか。例えば、Aさんに対して先生や生徒も差別していたのではないか。周囲の生徒の「慣れたからいい」という発言があったが、「慣れた」らそれでいいのか。

報告者 分けられた教育の中で生きてきた子たちはAのような存在に出会ったことがなかった。Aのような存在が当たり前にいることが普通になり、「慣れた」という感覚は大事だと思う。でも、その「慣れた」という言葉の中に「あいつ障がいがあるから」みたいな差別がにじみ出ているとも感じる。

滋賀 Cという生徒が出てくるが、Cは吃音があることを隠していたという話があった。なぜ隠さなければならなかったのか。

報告者 Cに対しても、吃音を隠さなければならぬ周りの眼があった。この人はそういう人なんだという周りの眼があったからCは自分のことを言えなかったのではないかな。

奈良 枠からはみ出すに人間を排除していく社会、それではいけないと思う高校でもインクルーシブを取り入れている報告者の実践はとても心強く感じた。Bという生徒が出てきたが、Bは1年の中でどのように変わっていったのか詳しく聞きたい。

報告者 Bと周りの生徒がけんかになるのは、周りの子がBに積極的にかかわろうとするから。Bがキツイものを抱えさせられているのはクラスメイトならわかる。でも、周りの生徒はBを排除しようとしていなかった。Bの現状や背景をちゃんとわかろうとしてかかわろうとしている姿を見せつけられた。だからこそ、Bは変わっていったんだと思う。

熊本 報告者の熱が伝わってきた。自分の思いを生徒たちに伝えようとしている姿に感動した。

報告者 自分の熱量の源は生徒に問われたこと。問われたことの重みが今も自分を突き動かしている。

京都 Aにとっての解放って何だったのか。実践を進めていくうえで大事なことは、その子にとって解放があるかどうかだと思う。

報告者 Aの本当の解放はこれからだと思う。自分はそこまでは到達できなかった。中途半端など

ころでとまっていたと思う。

一報告2ー①

「大切なものを隠さず、ありのままの自分でいれるようになりました」 (熊本県人教)

2本目のレポートは、中学校の「見つめ・綴り・語る」取組を、子どもたちと向き合い、共に創っていく中で、報告者自身が家族との出会い直しを果たし、「語る」ことの価値や意味をとらえていくことができたという内容だった。報告の中ではご自身の家族と向き合う中で生まれた変容も語られた。

ー主な質疑と意見ー

大分 自分を語る取組はどのように行われているのか。

報告者 小学校のころから続けて行われている。中1では「自分を語る」、中2では「家の人の仕事」、中3では「進路公開」というテーマで行っている。中1では、なかまに知ってほしいことを語り、中2では親の生き方や思い、親の夢を聞き取り、自分の暮らしと向き合う、中3では、こんな生き方をしたいなどなかまに最後に伝えたいことを語る。

大分 お父さんとはどのように向き合ったのか。

報告者 自分は父と向き合ってこなかった。でも、語る取組を進める中で、それではいけないと思った。でも、最初に綴り始めたときは悪口ばかりだった。周りの人のサポートを経て、父や母の色々な姿を知ることになった。そんなことを繰り返す中で、向き合えるようになっていった。

東京 親が保護者ではない人はどうしているのか。語って明るくなった子は、なぜ明るくなったのか。

報告者 誰に聞かかは子どもに任せている。こちらから指定はしていない。この人なら聞けると思った人に聞けばいいと話している。そこから少しずつ広がっていった。もちろん複雑な家庭事情の中で書けない子もいる。でも、周りの子の返しを聞いているうちに、安心して語れるようになっていく姿がある。また、綴る中で差別が見えてこなければやっている意味がない。差別が見えてくる中で自分自身の差別意識と向き合ったり、自分の家族と向き合うことができる。その繰り返しの中で自分自身が解放されていくのだと思う。

神奈川 ご自身にとっての差別の現実とは何だったのか。

報告者 自分自身は親の仕事に対する差別心が強かった。自分自身がもっていたマイナスイメージがあったから母に「ごめんね」と言わせてしまった。大事に育ててくれたのに、「給料が安い」とか「匂いがキツイ」とか言って親に誇りをもてなかったことを一番謝りたいと思っている。

京都 自分自身には語れないことがある。子どもたちが語ってつながっていくことはもちろん大切

なことだと思う。でも、教師もそこで語らないといけないのか。教師の介入がない、教室の外で自然に語り、つながっていける子どもたちを自分は育てたいと思って実践を進めている。

報告者 差別をなくすということを考えたとき、自分を見つめることが大事だと思う。自分が生きてきた中に差別があったということに気づけないといけないと思う。でも、絶対に語らないといけないとなったらしんどい。だから段階を踏むようにしているし、全部語れなかったらそれでもいいと思っている。語る取組は、それを受け止めてくれる集団がないと成り立たない。相手の思いを受け止める、聴く側にも責任がある。

熊本 子どもたちの取組は、段階を踏んで丁寧に行うことと、対話を通して続けることを大事にしている。語りを進める以前に細かい取組をたくさん積み重ねて行っている。

熊本 旭志の取組は、強制しているわけではない。自分たちにできることを続けている。見つめ、綴り、語る、その先には差別をなくしていく人たちを育てていくことを目標としている。その中で、問われるのは子どもたちだけなのだろうか。先生は問われないのだろうか。最後は「自分はどうするのか」にたどりつく。差別をなくす側に立てているかを問うていきたい。そのことが社会のシステムを変えていく人を育てることにともつながると思う。

熊本 1991年に旭志で部落差別事件があった。なぜそんなことが起きたのかを考えたとき、それは子どものせいにはできない。我々大人に問題があったのではないかと考えた。その思いから人権教育の取組が始まり、差別をなくす子どもを育てたいという思いで実践を進めている。子どもが語るまでには話し込みをたくさんする。一番深くかわる先生、子ども同士で聞き取りをする。そこを丁寧にするから語れるようになると思う。語れるなかまづくりができたかどうか検証している。子どものもっているパワーはすごい。それを大事にしたい。

兵庫 とてもすごいことをやっている。語れるか語れないかは、そのなかまづくりが大切なのではないだろうか。いかに「語りたい」と思えるなかまをつくれるかが大切だと思った。この実践が続けることが、大人になったときに「人が話すことをちゃんと受け止めて、自分のことも語れる」につながると思う。そんな中で、子どもだけではなく、先生も語ることは、子どもにもいい影響が出ると思う。

熊本 自分は報告者の教え子で語る取組にも参加してきた。語る取組は、旭志が力を入れていることもあるけれど、先生たちもすごく頑張ってくれている。だからすごくあたたかい。先生はすごく熱く思いを語ってくれたし、一人ひとりに向き合ってくれた。先生の語りは自分に勇気をくれたし、自分も家族のことを語る中で、心が解放された。先生が語っ

てくれたことは、自分たちに心を開いてくれたと感じている。自分も語ってみようかなって思わせてくれた。全部語れなくても、自分たちの返しの中でどんどん深まっていった、そのことをきっかけにできなかったともつながっていった。ここに自分の居場所があるって思わせてくれる、それが「語り」だった。

（総括討論１）

熊本 旭志の取組は、なかまを一人にさせないという思いで行っている。旭志が取り組んでいることをぜひ皆さんにしてほしい。

熊本 自分も子どもの時から語る取組をやってきた。語れるクラスをつくってもらったことに今でも感謝している。そういう取組があったから今の自分を好きになった。

東京 実践の中で子どもや親を取り巻く差別の現実が見えてくる。その差別の現実はどう向き合い、どう変わっていったのがもっと見えると良い。それが次の取組につながると思う。

京都 差別をなくしていくためには、心の問題と制度の問題の両輪が必要だと思う。両輪の議論が必要。差別はいけないこと、そしてそれは社会の問題でもある、そこにどうやって向かわせるか、ということも考えていかないといけない。

鳥取 差別を自分のこととして捉えることは大事なこと。でも、自分の問題でおわるのではなく、社会の問題として考えていかないといけないと思う。

熊本 自分は通級を担当しているが、クラスから分離しようという考えではなく、クラスの子たちと一緒にやっていくための力をつける取組だと思っている。子どもたちをみんなでなかまになって見ていくことを大事にしている。

神奈川 東京のレポートは現状のシステムを批判するためのレポートではなく、子どもたちが同じ空間にいて子どもがどんなふう to 育っていくか、つながっていくか、そういうことを伝える取組だと感じた。

滋賀 いろんな子がいる。すべてを一緒にすることがインクルーシブではない。すべてが一緒になることでしんどい思いをする子もいると思う。だからこそ、選べるのが大事なのではないか。

滋賀 しんどさを抱えている生徒がいても、先生は「この子をもちたくない」とかそういうことを言わないようにしてほしい。報告の中でそういう言葉を使う人がいるという話があったが、職員室内にそんな言葉が飛び交っていること自体が、人権教育を進めていくうえで違うのではないかと感じる。

報告者（東京） 教員がどこに立つかが大切だと思っている。決めつけている自分はいないか、そんなことを考えた。子どもたちに提示する選択肢は平等なのだろうか。その選択肢を保障するのは教員の仕事ではないのだろうか。

報告者（熊本） レポート報告ができてよかった。色んな人が来てくれた。家族や教え子も来てくれてとてもうれしかった。このレポートを報告するために母とも色々な話をすることができた。

一報告３－③

手話の文化から人権を考える～鈴高 手話講習会の取組～（兵庫県人教）

３本目のレポートは、補聴器をつけた生徒の入学をきっかけに始まった人権学習の取組が報告された。報告者は、生徒たちが自主的に取り組む活動を大事にし、サポートはするが、生徒たちを信じて任せることにこだわっている。自分たちで企画した活動だからこそつながって、広がって続いているということが成果として語られた。

一主な質疑と応答一

愛媛 手話を学んだことで子どもたちはどのような変化があったのか。

報告者 生徒の変化については確認できていない。表情は明るくなっている気はするし、何かを伝えるときにわかりやすく伝えようと一生懸命頑張ってくれていると思う。

兵庫 興味をもっていない生徒についてはどのようなアプローチをしているのか。

報告者 私自身はできていない。参加した生徒たちが自分たちで友だちを誘ったり、声をかけて講習会に連れてきてくれたりした。

奈良 聴覚障がいのある生徒はどのようなことに困っているのか。

報告者 グループディスカッションが難しい。聴覚障がいのある生徒が中心になるように会話をするとうわりやすい。そのことを周りの生徒が理解するとスムーズにできるようになる。

東京 聴覚障がいのある生徒が講習会に「来てやったで」という発言をしたことが気になっている。この言葉をどうとらえているのか。当事者抜きの実践ではいけないと思う。

報告者 自分はそんなに深い意味はないととらえていたが、そうではなかったかもしれないということに今気づいた。そこに差別の現実があったのかもしれない。

東京 司会の生徒はなぜ自分で希望してきたのか。どのような思いをもっていたのか。この活動の先にどのような展望をもっていたのか。

報告者 一人は手話検定をめざしている。もう一人は高齢者の認知症サポーター講習の企画などを行っていた生徒。背景までは把握していなかったが、この取組をきっかけにして、色々な人の人権について考えられるようになってほしいと思っている。学んだことを将来生かして生活してほしい。

東京 聴覚障がいのある生徒はどんな思いでこの活動を見ているのか。

報告者 聴覚障がいのある生徒の思いは詳しくは聴き取れていない。どうやってかわりをつくらいいかを皆さんに聞きたい。

鳥取 わからないことはやっぱり聞いていかないといけない。教師の決めつけではなく、まずはしっかり話をしてほしい。「どうして」と尋ねてみてほしい。

京都 子どもが困っていることを困っていると言える空間を作りたい。そういうところから始めたらどうだろうか。

神奈川 「困っていることは何か」ではなく、その子が「大切にしてきたことは何か」を聞いてほしい。関係はつくっていくもの。先生がその子とどういう関係をつくりたいのかが大切だと思う。

東京 報告者がいろいろな取組をしていることを生徒たちはちゃんと見ている。聴覚障がいのある生徒の困り感の解消に合致していなくても、やろうとしていることはちゃんと伝わっている。だから頑張る取組を進めてほしい。

一報告 4-②

「Aさんは、その2行を削除した。」

(大分県人教)

4本目のレポートでは、母親から部落出身を告げられたAの立場宣言をめぐる中で立ち上がった差別の現実とそこにAとともに本気で向き合った報告者の姿が語られた。レポートの中では、共に悩み、考えていく中で差別をなくす当事者は誰なのかということが問いかけられた。

一主な質疑と意見一

京都 お母さんの「あとは頼んだ」という言葉にはどんな思いが込められているのか。

報告者 立場宣言については母が話をするからそのあとのフォローをお願いしますという意味だと自分は考えた。

神奈川 Aは学習会にどういう経緯で参加していたのか。

報告者 親の勧めで学習会に出ている。Aは中学時代に出会った先生との出会いも大きかったと思う。その先生には、自分がトラブルに巻き込まれた時に助けてもらったからすごく信頼している。

東京 Aは自分が部落出身だということは実は知っていたのではないか。

報告者 Aに直接聞いたが、本当に知らなかったらしい。どこか遠くのことだと思っていた。今はAは自分の立場を明かしたいと思っている。言うか言わないかはAが決めることだが、自分はその思いを応援したい。

新潟 「部落を打ち明ける」という言い方が気になった。部落を重荷を背負うみたいに感じさせないでほしい。

報告者 Aさんが語りたかったことは、重いものを

背負っているということではなく、厳しい差別の現実を知ったので、この差別をなくしたいということ。語りたいのは、差別をなくしたいから。

兵庫 Aの打ち明けたいという気持ちを聞いたときにどういう気持ちだったのか。

報告者 差別をなくす当事者としてAとともに立っていかうという決意を強くしている。

京都 子どもたちには「部落差別はなくせる」という展望をぜひ伝えてほしい。

熊本 Aの話聞いて、教職員集団が学校がどのように変わったのか知りたい。

報告者 教職員はまだつながりがつくれていない。そのことがAや、しんどい思いをしている子を苦しめているかもしれない。学年の中で情報を共有したり、何時間もかけて授業をつくろうという動きはあるが、Aの思いに沿った授業はまだできていない。

東京 母親との関係はどのようにつくっているのか。母親の思いは聞いているのか。

報告者 保護者同士をつなげようと思って保護者会を実施したが、初対面同士で深い話ができるわけもなく、逆に母につらい思いをさせてしまった。しかし、これをきっかけにAの母親とはつながることができた。Aの母親の思いも聞くこともできた。

協力者 Aはまだ高2で立ち上がっていく途中。報告者のことをすごく信頼しているし、報告者もその信頼に応えようとしている。Aさんのことを考え、やるべきことをやろうとしている。これからもつながってほしい。

Ⅲ. 総括討論 2 およびまとめ

熊本 大事なことは出身かどうかではなく、反差別の生き方をしているかどうかだと思う。出身の子どもがいたときにまわりの大人が反差別の生き方を貫いているかどうかで大きく変わる。先生方には学校の中で一緒に頑張れるなかまをつくって、反差別の取組を広めてほしい。

兵庫 子どもや親とつながろうと思ったときに、いきなりはつながれない。何回も何回もかわってつながってほしい。かわり続けることで色々な課題が見えるし、先生が時として親よりも身近になるときもある。根気強くかわり続けてほしい。

東京 自主活動はつながりが大事。一人ひとりの子どもの関係性だけを見ていくことは難しいと感じている。

熊本 なかまづくりの取組はとても大切。子どもだけでなく、教職員のなかまづくりも。反差別の集団ができていからこそ、自分のことが語られる。保幼小中高の連携の中で子どもを育てる、そんな意識をもっていたい。

熊本 一人で抱えすぎずに苦しい時は周りに助けを求めてほしい。人権教育は当たり前のことを当たり前前やっていかうという姿勢が大切。連携、連

帯して実践を進めていきたいと思います。

京都 兵庫の報告の良かったと思うことは、手話文化を学校に取り入れることで学校文化が変わっていくところだと思う。学校の当たり前を変えていくことはすごく大事だと思う。

大分 差別をなくすためにどういう展望をもっていくのかということを考え続けたい。出会うことで学ぶ、学ぶことでつながる、つながることで学びはまた広がる。自分にできることを身近なところから進めていきたい。

熊本 学校全体で実践を進めていくことの大切さを学んだ。学校の中でみんなで一緒に子どもを支える体制を自分もつくっていききたい。

神奈川 取組を継続していくことで、自分にとっての部落は何なのか、その問いに対する答えがだんだん見つかっていくのだと思う。自分自身の部落を大切なものとしてとらえなおせる日も来ると思う。お互いこの先も頑張りましょう。

京都 人権学習はすごく楽しいもの。反差別はオシャレでカッコいい。やっているとお会いがあって、勇気がもらえる。暗い顔をせずに明るくやっていこう！！

報告者（東京） 自分を明らかにしていく。でもそれはその先の展望があってのこと。それが反差別の生き方につながる。子どもを支えていける自分になれるように考え続けていきたい。

報告者（熊本） レポートしたことで、自分の家族が聞きに来てくれて、頼れるなかまがいるっていいねって言ってもらえてすごくうれしかった。自分自身も家族と向き合う時間がもてて本当によかった。

報告者（兵庫） たくさんのひとからアドバイスをもらい、あったかく励ましてもらった。楽しみながら実践を進める中で、もう少し子どもに対して踏み込んでみたらというアドバイスをもらった。子どものサインを見逃さず、子どもを決めつけず、しっかり話を聞いてみたい。兵庫に帰ってまた頑張りたい。

報告者（大分） フロアの言葉が身に染みた。なかまがいるじゃんって言ってもらえてうれしかった。力をもらった。ありがとうございます。

IV. おわりに

「なかまづくり」を軸にした自主活動とは、子どもたちが自らの置かれている状況を見つめながら、一人ひとりがくらしの中で感じている想いを出し合い、その想いを束ね、反差別の集団としてまとまりながら安心して過ごせる社会を実現していく活動のことである。子どもたちが自らの「思い」を語ったり、書き表したりすることで、なかまの思いや痛みを自分のこととして受け止めたり、ともに考えたりすることができるようになる。そのような取組を重ねる中で、なかまの絆

を感じとり、生きるエネルギーを獲得していくことができる。認め合い、支え合う集団の中で、子どもたちは人権感覚や人権意識を磨き、学校・地域の中で反差別、人権尊重の文化を創りあげていくのである。そして、取組を進めていく私たちは、子どもたちの立ち上がりや未来を切り拓く力を、自分の生き方へとつなぐ取組の創造の大切さを確認し合うと共に、私たち自身の「自主活動」を問い直し、自分の立ち位置を明らかにすることを問い続けてきた。

今大会においても4本のレポートから、職場や地域で人とどうつながっているのか、地元の人権課題にどれだけ学んでいるのか、目の前の子どもたちになかまのどんな生活を伝え、共有させているのか、そしてそのことを反差別の人権学習としてどう構築しようとしているのか、ということが問いかれた。

2日間を通して、「子どもたちがここにいていいんだと安心できる居場所をどうつくるか」「子どもたち同士のかかわりをどう深め、反差別の活動をどうつくっていくのか」「教室の外でも自分たちでつながっていける子どもをどう育てていくのか」「子どもを育てていくために周囲の大人がどうつながっていくのか」「差別をなくす当事者として、反差別の生き方ができているのか」「一人で抱え込まず、なかまをつくってやっていこう」「できることを身近なところからすすめていく」「困っている子としっかり話をし、教師が決めつけるのではなく、その子や親の願いや思い、大切にしてきたこと、どんな生き方をしたいのかをしっかりと聞き取ってほしい、そして、良き理解者になってほしい」ということが話題にのぼった。

報告には、実践者と子どもたち、保護者、地域などとの「確かな出会い」があった。その出会いから「人と人との確かなつながり」が築かれていた。「つながり」の中で、実践者が自身と向き合い変容していく姿があった。差別が存在する社会を生きる一人として、自分がどう生きるのか、周りとのどんな関係をつくっていくのか、差別心や加差別性に自分自身が向き合うということが具体的にどういうことなのかを報告や討議の中で確認できた。差別を見逃さない、許さない、そんな思いのなかまをつくり、差別の現実から学び、実践をつくっていく、そんな取組が地域を社会を変えていくことにつながるのだと感じた。日々の生活の中で苦しい思いをしている子がいる。その子たちの思いに寄り添い、支えていく自主活動がそんな子たちの居場所になっているということも確認された。だからこそ、子どもたちが生活を見つめ、語り合い、ともに考え、ともに支え合う「なかまづくり」「集団づくり」を軸にした自主活動

の実践が大切なのである。

まずは、自らが差別をなくす主体者となるためにこの学びを誰かに伝えるところから始めたい。どんなに小さな取組でも、差別のない社会をつくる推進者として自分にできることを自分らしく地域のなかまと取り組んでいくことが大事だということを確認して、本分科会のまとめとした。本日の研究大会で得たエネルギーを、そして課題を各地に持ち帰り、明日からの実践につなげていきたい。